

シリーズ 第六弾 野口動物病院

院長 野口 勝

こんにちは！ 東山町で開業して17年目に入る野口動物病院です。春は、狂犬病・その後フィラリア予防やノミの対策、暑さとともに熱中症や皮膚病・下痢などの消化器疾患が増え、11月はひと段落の季節となります。この時期は、それぞれの動物病院の特色である専門科目の疾患が増える時期とも言えるでしょう。

我々獣医師は基本的に全ての診療科目を診察するようにインターンの時にトレーニングを受けるのが一般的です。このインターンの時にどのような病院に入るのかで、何を深く掘り下げて専門科目とし、診察治療するのか・できるのかが分れてきます。また、開業した時の検査器具・手術道具・薬の用意なども色々変わってくると思います。

当院では、ご存じのように眼科を専門科目としており、以下のことに気をつけながら診察を行っています。

- できるだけ痛みを取り除く
- 全身状態を最優先する
- できるだけ視覚を確保する
- 飼い主様の時間的拘束を減らすために最小限の投薬の種類にする
- 自信が持てない、わからない症例は他院を紹介する
- 飼い主様が家族に説明できるように説明事項を紙に書いて写真とともにお渡りする

詳しいことはホームページに、今月の休診日と共に載せていますので、一度ご覧になって下さい。

最後になりましたが、いつも狂犬病集合注射、里親探し、犬のしつけ方教室など、ペットと人のよりよい共存に尽力されている芦屋動物愛護協会様に芦屋市獣医師会会長として感謝しております。これからもよろしくお願い申し上げます。

野口動物病院ホームページ http://www.coco.zaq.jp/noguchi_vet/index.html



動物のお医者さん

リレートーク

シリーズ 第七弾 フジタ動物病院

院長 藤田 武一

獣医療の昔・今・未来

私が芦屋で開業した昭和50年代後半（今から32年ほど前）は、最近の明るいオシャレな動物病院などはほとんど見られず、看板も〇〇獣医科、〇〇家畜病院とかの名称が使われていました。その頃の飼い主さんからは、動物病院に少し暗いイメージを持っていたと聞いたこともあります。今の動物病院の様に設備が充実しておらず、ようやく検査機器が出始めた頃は、まだ「血液検査」というものが一般診療の中に浸透していない時代で、私がインターンで勤めていた病院では、血液検査の1項目するのに20分もかかる時代でありました。それでも先人の先生方は聴診器と触診等、いわゆる五感を駆使して、しっかりと診断されていました。私は、問診と聴診と五感を使った診断を開業医ではまず第一にするべきだと最近になって改めて思います。その次に最新の医療機器で確実な診断治療を行い、次に必要であれば2次診療、高度医療へ紹介することが望ましく、またそれが出来る時代に獣医療も進歩してまいりました。

また、最近話題になった「iPS細胞」などによる再生医療が獣医療に臨床応用されるのも、そう遠いことではないでしょう。すでに整形外科の分野で行われているとも言われています。「ペット」から「コンパニオンアニマル」へと呼び方も変わり、

ますます動物達が家族の一員として確かな存在となっていることを感じています。家族構成が変わり高齢者の1人暮らしや、若者の1人住まいがこれからはますます増加するでしょうし、人と動物がお互いになくはならない存在になっていくに違いありません。セラピー犬が人間の老人医療にかなり貢献している事実はまぎれもなく、現代社会の中でコンパニオンアニマルは重要な働きかけをしていると言えるでしょう。我々獣医師も、飼い主様とコンパニオンアニマルの為に日々の診療にますます責任の重さを感じないではいけないこの頃です。

これからも人と動物との絆と深いお互いの思いが強くあり続けることを願うとともに、少しでもコンパニオンアニマルと飼育者のお役に立てる様、我々獣医師も獣医療に携わって行きたいと思っております。

